

入学式における新入生の着席時刻と服装の色との関係

岩城万里子・吉岡 英二・井上 道雄

はじめに

どのような服装をしているかは、その人物の性別・年齢だけにとどまらず、社会的地位・性格などとも深く関連していると考えられる。私たちは、ふつう相手の服装を通してその個性を推定する。また、意識する／しないに関わらず、私たちは自身の社会的地位・性格の表現媒体としてさまざまな服装を使い分けていると言えるだろう。このような服装の多様性をもたらすものとしては、生地・材質やデザインとともに色彩も重要な要素であると考えられる。

色彩の好みがその人のパーソナリティを反映するという考えは、幾つかの心理検査にも取り入れられている(近江, 1987)。そのひとつであるカラーピラミッドテストは、被検者に「好き」「嫌い」といった基準で色彩カードをピラミッド状に並べさせ、その配色パターンに基づき情緒安定性・適応力・内向／外向といった性格特性を判定するものである。また、小保内・松岡ら日本人によって発展させられてきた色彩象徴テストは、後悔や歓喜といった感情を表す刺激語を提示し、その言葉から受ける感じに一番よく当てはまる色を選ばせ、それらの色彩感情の特徴から被検者のパーソナリティを測定し、それを類型化するものである。そのほかにも色彩を手がかりにパーソナリティを解明しようとするいくつかの心理検査が開発されてきている。

このような認識を背景にして、入学式における女子学生の服装に関する近年の傾向についての調査研究がされてきている(飯塚, 1993; 横田他, 1988, 1990)。これらの論文では、近年の学生のライフスタイルの多様化にともない、入学式という格式張った席でも服装のスタイル・素材・色・柄ともに自分の好むものを自由に選ぶ傾向が見られることが明らかにされた。このように、最近の女子学生は、服装を選択する際に社会的な制約を受けることが少なくなってきたことから、同様に集合時間などをめぐる社会的な行動規範とも何らかの関係をもつのではないかと考えられる。

以上の観点から、K女子短期大学の新生が最初に集まる入学式で、時間的に余裕をもって来る学生からぎりぎりに来る学生までの、入学式場への入場時刻の違いが、その服装の色彩に何らかの関連をもつかどうかを調査した。また、この調査プログラムの延長として、今後どのような調査計画を立てることができるかについて考察した。

調査方法

1997年4月3日にK女子短期大学の体育館で行われた入学式で、着席が指示された時刻(午

前10時30分)に、k学科新入生208名の着席位置ごとの服の色を記録した。服の色は、黒または濃紺・濃い灰色・うすい灰色・ベージュ・ピンク・白・その他の明色・その他の暗色、の8つの区分にしたがって記録した。とくに灰色系の濃淡に関しては、境界となる明度の指標となる2例(濃いと判定されるうちもっともうすい色・うすいと判定されるうちもっとも濃い色)を定めて、それらとの比較によって再度確認し、恣意的な判定を排除した。

座席は6席を1列として35列(210席)用意され、来場した新入生には前方より演壇に向かって左側より順次詰めて着席するように指示される。新入生のうち早いものは9時ごろから入場し、10時30分には208名が着席していた。(間に空席を置かず着席した結果、最後尾の列の右側2席が空席となった。)入場時刻に大きな偏り・集中などは見られず、ほぼ滞りなく1時間30分の間に次々と入場して指示どおりに着席していることが観察された。新入生は、座席を立つことはあってもまたもとの場所に着席するように指示されるので、着席場所は時間経過による入場の順序を正確に反映しているものと考えられる。

結果

記録された着席位置と服の色を、図1に示す。また、その結果を前半と後半(各104名)に分けたそれぞれの服の色毎の度数と、無彩色/有彩色・暗色/明色間でその偏差が生じる確率を χ^2 検定により算出し表1に示す。

以上の結果、無彩色/有彩色という区分からは前半/後半で有意な偏差は見られなかったが、暗色/明色という区分からは明色が後半の側に多く現れる傾向が見られた。また白が後半に多く現れる傾向も有意(2項確率より $r=0.0078$)であった。

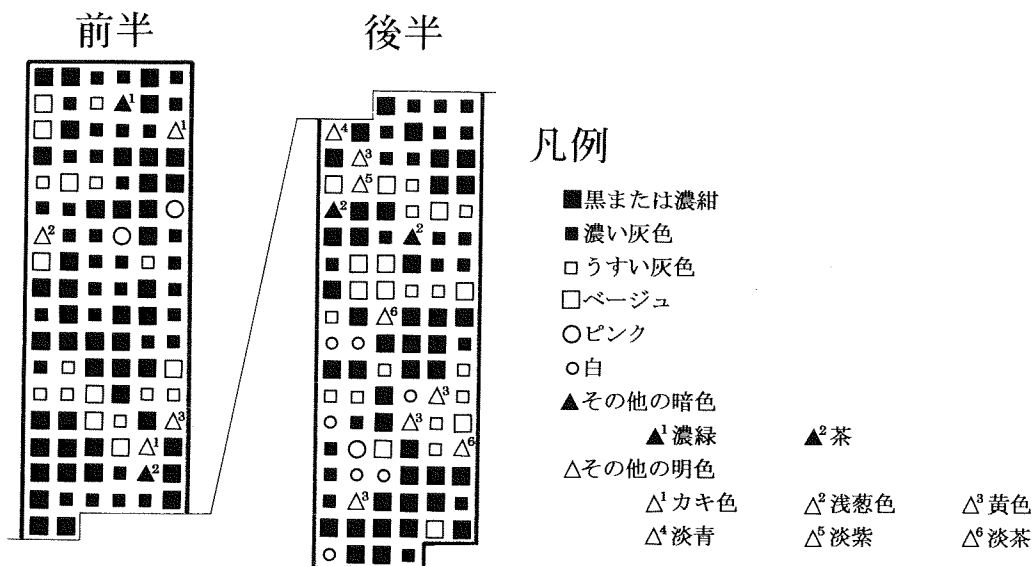


図1 座席位置と服装の色彩。実際は6席を1列にして35列が連続して並べられているが、この図では前半と後半(各104名)を切って示している。

表1 前半と後半に分けた服の色の度数と統計分析の結果

色彩\着席位置	前半	後半	全体	r
① 黒または濃紺	45	41	86	
② 濃い灰色	33	21	54	
③ うすい灰色	10	13	23	
④ ベージュ	8	11	19	
⑤ ピンク	2	1	3	
⑥ 白	0	7	7	
⑦ その他の暗色	2	2	4	
⑧ その他の明色	4	8	12	
無彩色(①+②+③+⑥)	88	82	170	
有彩色(④+⑤+⑦+⑧)	16	22	38	0.2816
暗色(①+②+⑦)	80	64	144	
明色(③+④+⑤+⑥+⑧)	24	40	64	0.0162
合計	104	104	208	

考 察

新入生の集合に限ったことではないが、定められた時刻よりどれくらい前に入場するかということには、さまざまな条件が関与する。たとえば、自宅（その他の出発地点）から目的地までの地理的／時間的距離・移動経路に対する理解度・公共交通機関の発時刻／乗車時間等・およびその理解度・予測不能の事故などの条件が挙げられる。今回のケースでは、それぞれの新入生がさまざまな場所から来校するものの、当然全員が通学可能な範囲内から来ていることは疑いようがない。また、通学経路などの理解度についても、入試等で最低でも1回はすでに来校しており、それ以外にもさまざまな機会（オープンキャンパス・試験場の下見・複数回の受験）に際しても来校している新入生は多い。また、調査対象とした短大は神戸市内でも最も繁華な地域と近接しており、これらのことから新入生の多くはすでに十分な土地勘をもっていると考えられる。また、当日は近辺の交通機関の運行に影響を与える事故などは起こっておらず、そのことは新入生のほぼ全員が通知された時刻に間に合って着席していることから伺える。

今回の調査での着席時刻は、いちばん早い学生とおそい学生との間で1.5時間の広がりをもつ。この時間を距離に置きかえると、学舎の所在地を中心に通常の学生の住居がほぼ全部包含される。（今回調査した入学式前の時間帯であれば、JRで最寄り駅の‘元町’まで乗り換え時間等を含めても‘姫路’～‘京都’までのいずれの駅からでも片道1時間以内で行くことができる。）以上の点を鑑みると、今回新入生が定められた時刻よりどれくらい前に入場するかと

ということには、それぞれの社会的状況よりも、個々人の集合時刻に対する心構えといった行動規範／性格等が反映しているものと考えるのが妥当であろう。このような性格と色彩の関係を臨床心理学の側面から扱ったものとしては、先に挙げた近江（1987）の総説などが知られる。そこで挙げられた色彩にかかわる心理テストの主たる目的は、精神障害などの病態の情緒面への表われをつかむことであり、ここでの調査結果を吟味し分析する手がかりとして適当とは言えない。

一方、色彩に関わる社会心理学的な側面について扱った文献はこれまでもいくつか見られる。金子（1988）は、色彩心理学の基礎論の文献として重要なものであり、著者自身はそれを‘実験心理学的色彩論’と位置づけている。この文献は、‘感覚’としての色覚と、その背後にある‘物理現象’としての光あるいは色彩との関係をどのように理解するかという問題に対して、生理学－実験心理学の立場から説いたものである。また、色彩論の歴史についての記述などを含め、興味深い文献ではあるが、色彩と個性との関係や社会との関係などにはいっさい触れられていない。大山（1994）では、大半の記述は感覚心理学としての色彩論に割かれているが、その最後に‘色と感情’と題する一章があり、色が与えるイメージ・象徴性・好まれる色などについての若干の記述がある。しかし、その中でも色彩と個性との関係や社会との関係などについての考察は見られない。小町谷（1992）では、明治から現代までの色彩の流行の変遷と社会状況の変遷とを比較し、それらの関係について議論している。特に、服の色の流行や色に対する嗜好が、その時代の社会状況の反映であることを歴史を追って論じている点は示唆に富む。しかし、服の色と個性との関連については触れられていない。

色彩心理学でいう「あなたは色として何が好きですか」と聞いたときの抽象的嗜好色と個性との関係については、千々岩（1979, 1984）で詳細に述べられている。そこでの議論を参考に今回の調査結果を以下で考察する。

近年、入学式に臨む女子学生の服装の色は、黒や紺にこだわることなく流行の色などを取り入れる傾向にある（飯塚, 1993）。このことは、最近の学生たちが伝統的社会規範にあまりとらわれなくなった結果と考えられている。ここで、入学式に選択した服の色を抽象的嗜好色と重ね合わせ考察を試みる。今回の調査で入学式会場の後半部分にかたよりのあった明色を好ましいと思う学生の心理は、肯定的な人生観を持ったために、物事に楽天的で、ややもするとうっかりしてしまうこともあり、その結果少々弱気で、明るい色で自分の内面を強めていると千々石（1979）は考えている。したがって、明るい色の服装をしている女子学生が、入学式の後部座席に集中するのは、「このくらいの時間でいいかな」と思い、出かけてみると開会ギリギリにすべりこむという楽観的な判断からおこりがちなお粗末な結果を招いているのではないかと推察される。

なお、対照的に、暗色を好ましいものとする学生の心理としては、人生に対して疑い深い性格を持ち、何事にも用心してかかるので失敗が少なく、その結果自信家が多いと考えられてい

る。そのため、入学式への登校にも、用心深く、時間の余裕を持って臨もうとし、前の方の座席へ着席できる。このとき時間の余裕というのは、ふつう数十分で充分かと推察するが、1.5時間も前に着席した学生などは、相当な用心深さであるかと思われる。

服装の色の選択というのは、具体的嗜好色といって、たとえば、「浴槽の色は何色が好きですか」と尋ねたときの答えのようなもので、単に何色が好きかと尋ねたときの抽象的嗜好色と異なることもあるといわれている。しかし、70品目にわたって調査した具体的嗜好色は結果的に抽象的嗜好色に一致するという。したがって、今後の課題として、少なくとも新入生の服装調査とともに、学生に抽象的嗜好色を尋ねるなどのアンケート調査が必要であろう。また、今回の調査では学生の服装の色のみに着目したが、今後は同様の研究プログラムに沿って、早く来るか遅く来るかということと学生の住所地など社会的要因との関係や、性格検査などによって知りうる心理的要因との関係について調査することも可能であろうと考えられる。

引用文献

- 千々岩英彰 (1979) “原色を好む心理・中間色をきらう論理” p.67-86. (日本書籍(株)・東京)
- 千々岩英彰 (1984) “色を心で視る一色彩心理学素描” pp.15+241+4. (福村出版・東京)
- 飯塚弘子 (1993) “入学式の服装に見る着装意識” 家庭科教育67 (3) : 32-36.
- 金子隆芳 (1988) “色彩の科学” (岩波新書・新赤版44) pp.15+x+220+6. (岩波書店・東京)
- 小町谷朝生 (1992) “色彩の発見” (NHKブックス638) pp.213. (日本放送出版協会・東京)
- 近江源太郎 (1987) “色を用いた心理テスト” 色彩の事典, p.283-296. (川上元郎・児玉 晃・富家 直・大田 登編・朝倉書店・東京)
- 大山 正 (1994) “色彩心理学入門” (中公新書1169) pp.4+iv+6+237. (中央公論社・東京)
- 横田義男・小野幸一・山田敦子 (1988) “入学式における女子学生の衣装の研究” 衣生活 (278) : 66-71.
- 横田義男・小野幸一・西迫トシエ (1990) “入学式・入社式における式服の研究” 名古屋女子文化短期大学研究紀要(16) : 67-74.

